SNS を用いた第二言語ライティングにおけるフィードバック
Feedback in Second Language Writing Using SNS

谷口正昭（静岡産業大学 情報学部）
谷口ジョイ（静岡理工科大学 情報学部）

1. 研究の背景

インターネットの普及に伴い、第二言語学習者の文章作成におけるストラテジーにも変化が生じている。筆者らはこれまで、日本国内の高等教育機関で学ぶ留学生が、第二言語である日本語によって学術的な文章を作成する際に、どのような問題に直面し、どう対応しているかを調査してきた（谷口・谷口, 2019）。その中で、多くの学生が SNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）を利用し、課題を解決していることが明らかになった。留学生は、第二言語である日本語によって勉学を遂行するため、さまざまなリソースを駆使しているが、現在、その「学習の場」は、異なる言語や文化背景をもった人々の接触が可能となる SNS 上へと拡がりを見せている。本研究では、文章作成時に留学生が、SNS 上でどのような支援を要請し、どのようなフィードバックを得ているのかについて、聞き取り調査を行い、実際のフィードバック場面の分析と合わせ、考察した。

2. 調査方法

本研究では、日本の大学で学ぶアジア出身の留学生 20 名（漢字圏 4 名、非漢字圏 16 名）を対象とした半構造化インタビューをおよそ 6 ヶ月毎に行い、(1) 調査対象者が学術的な文章を作成する過程において、SNS をどのように利用し、具体的にどのようなフィードバックを得ているのかについて、主に調査している。また、(2) 実際の SNS 上での問題解決場面を分析し、学習者が要請する支援の種類、及び引き出されるフィードバックの特徴について検証している。面接調査の時間はいずれも、1 時間程度であり、協力者の同意のもと、録音・録画を行った。インタビューによって得られた言語資料は、すべて文字化し、質的テキスト分析法[1]（Kuchartz, 2014）に基づき、QDA ソフトウェアを用いて分析した。

3. 結果・考察

調査の結果、留学生は、文章作成におけるあらゆる段階で、日常的にインターネットを利用しており、さまざまなスマートフォンアプリを活用し、必要な情報にアクセスする手法を身につけていることが分かった（図 1）。

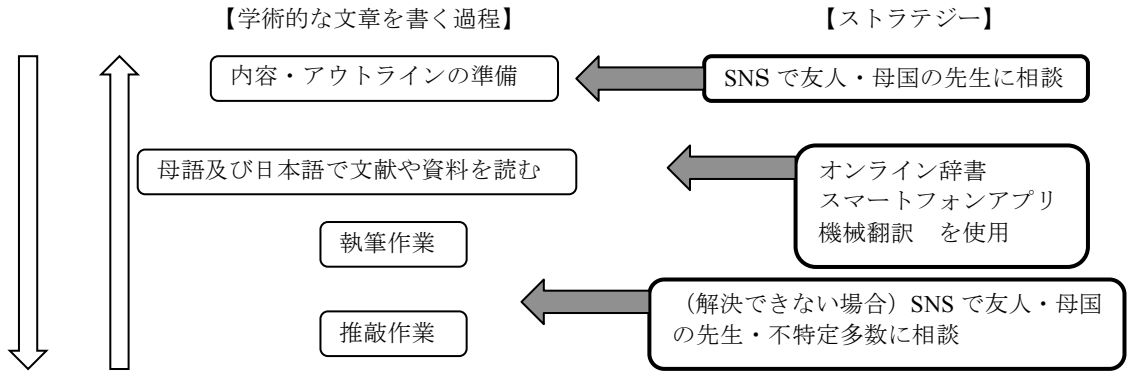

図 1 ：文章作成におけるストラテジー

[1] 「質的テキスト分析法」とは、分析のガイドラインに従い、データをコーディングした上で、個々の事例に関する詳細な分析を行う手法である。

また、主に語彙や文法、漢字については、オンライン辞書や学習用アプリケーションで自ら調べる手段をもっており、それらによって解決できない課題については、SNS で解決を試みていることが分かった（以下の発話例参照）。

C1: 日本の先生が、ん、中国に、日本語、んー、教える。笈川幸司（おいかわこうじ）、分かりますか↑（分からないです。）元々はこの先生は北京大学と清華大学の日本語先生です。（中略）この人が WeChat 持っていて、そこで教えてくれる。assistant、彼の、assistant は 10 何名ぐらい、大体は、ほとんどは中国の日本語科の学生です。（中略）彼は、この交流はそんな多くない。分からない時に、あ、自分でネットで探して、ほとんど分かる。どうしても分からない時は WeChat で。（例えば、どんな質問をしたか、覚えていますか↑）今、覚えて、「ところで」「ところに」「ところを」「ところが」…

SNS を用いる際、その対象は友人・知人に限定したものから、不特定多数に向けられたものまで、さまざまであった（表 1）。

表 1: 分析ワークシートの例

概念	定義	発話例
SNS による不特定多数への支援要請	学術的な文章を作成する際、SNS を用いて面識のない不特定多数に質問をする	あと、もしかしたらツイッターにもアップして、誰か知らない人が回答することもある。
		「百度（bǎidù）」の「知道（zhīdao）」、これ、みんなで質問して、答えて…
SNS による友人・知人への支援要請	学術的な文章を作成する際、SNS を用いて友人や知人に質問をする	ゼミで知り合いになった日本の学生さんたちがいて、バイト先で知り合いになった日本の子もいますね。LINE で問題送って、そしたら彼たちが返事を来る。たまに、日本人も分からない問題も出ます、本当に。
		友達に、日本人はこういう言い方しますかって。LINE で。

また、SNS を利用した文章作成に対する意識・評価は流動的なものあり、日本語の習熟度が高くなるにつれて、SNS で得られるフィードバックへの信頼度は低くなり、自ら修正するようになっていた（表 2）。さらに、SNS 上でのフィードバック場面から、母語話者の規範が重視されていることが明らかとなった。

表 2: 分析ワークシートの例

概念	定義	発話例
フィードバックへの低い信頼度	SNS を用いて得られるフィードバックに対して、信頼が低いと認識する	「百度」、使い…ですけど、これの正しさはそんな…（あまり正しくないですか↑）そうです。正しさは自分で検察（＝チェック）します。

SNS 上では、留学生、母国の教員、日本語母語話者の友人・知人、あるいは不特定多数の日本語学習者との間で、文章作成における課題についての対話がなされていた。ここでは、正しい言語形式のみならず、その内容や構成についてもさまざまな意見が交わされ、参考になる書籍や資料の情報、外部リンクやスクリーンショットなどによって、議論が補強されていた。対話の形式も「質問者が問いを投げかけ、回答者が正しい答えを提供する」という一方向的なものではなく、質問者、回答者の双方が「意味の交渉 (Varonis and Gass, 1985) 」を繰り返し行うことによって、適切な答えを引き出していることが確認された。また、こうした双方向的なフィードバックは留学生が文章作成能力を伸長する上で「足場づくり（scaffolding）」としての役割を担っていることが示唆された。

4. まとめ

これまでは、第二言語学習者の「学習の場」は教室が中心であり、第二言語ライティングに関する研究においても、教室内でどのような教育活動がなされるべきか、あるいは、教師はどのようなフィードバックを学習者に与えるべきか、という議論が中心になされていた。(Ferris, 1999, 2004)。しかし、2010 年にスマートフォンの普及が始まり、第二言語学習者が利用するリソースは大きく変化している。人工知能が瞬時に翻訳を出力する時代にあって、日本語教育のあり方も変わらざるを得ないであろう。

本調査により、SNS 上の対話により、文章作成能力の向上に結びつくような「気づき」や「学び」が喚起されていることが分かった。また、構文や語彙の正確さを向上させるためにはオンラインの辞書や機械翻訳を用いるが、全体の構成や内容など文章作成のマクロ的な側面、つまり「機械が代替できない言語技能」については、オンライン上の対話によって解決を図っていることが示唆された。引き続き、調査を継続し、IT 技術の核心とともに、学習者の文章作成ストラテジーがどのように変化し、それによってどのような問題や課題が生じるのかについて、検証を行いたい。

〈謝辞〉
本研究は、科学研究補助金基盤 (C)「対話を通した第二言語ライティング能力の育成」課題番号 15K02663（代表：谷口正昭）の助成を受けています。

【参考文献】

谷口正昭・谷口ジョイ（2019）「日本語アカデミックライティングにおける課題–留学生の視点から」『静岡産業大学情報学部研究紀要』21, 31–44.

Ferris, D. R. (1999). The case for grammar correction in L2 writing classes: A response to Truscott (1996). *Journal of Second Language Writing*, 8, 1-10.

Ferris, D. R. (2004). The “grammar correction” debate in L2 writing: Where are we, and where do we go from here? (and what do we do in the meantime…?). *Journal of Second Language Writing*, 13, 49-62.

Kuckartz, U. (2014) Qualitative text analysis: A guide to methods, practice & using software. London: Sage.

Varonis, E. M., & Gass, S. M. (1985). Non-native/non-native conversation A model for negotiation of meaning. Applied Linguistics, 6, 71-90.